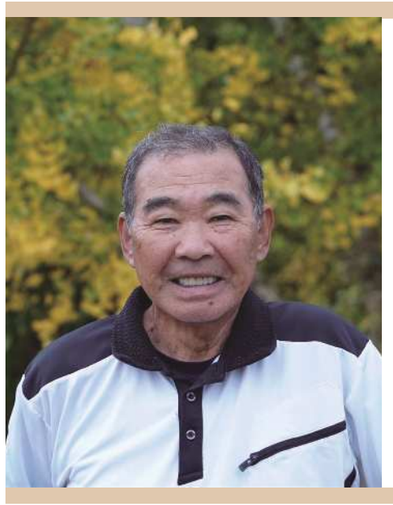

episode.10

人と人が繋ぐ伊佐の鮎

話し手 川内川上流漁協　理事
古里 秀人（ふるさと ひでと）さん（昭和 23 年 9 月 10 日生）

聞き手 川島学園　れいめい高等学校
２年　橋本　漣
２年　堂脇　考祐

「川内川の“湖産（こさん）鮎”」

鮎は、基本的にきれいな川である程度の流れがないと育ちません。川に生えている藻を食べて大きくなります。スイカのような香りの魚で「香魚」とも言われています

鮎は、１年で一生を終える“年魚”です。秋頃に川で孵化して、海で冬を過ごし、春に川へ行き、夏に川の上流で成長して秋に川の中流で産卵して一生を終える。

でも川内川上流の鮎は、鶴田ダムがあるから海へはいけないんですよ。こういった鮎は“湖産鮎”っていいます。秋に川内川で孵化したら、鶴田ダムで冬を過ごし、春になったら川内川の支流へ行き、秋になったら川内川に戻って産卵して一生を終える。

でも、ここ十数年で鮎が獲れなくなりました。原因はいろいろあるけど、カワウの被害は大きい。十数年前からなぜかカワウがたくさん来て、鮎だったり、鰻だったりをたくさん食べる。大きな鯉を丸呑みしている写真も撮りました。

他にも、外来種の水草ホテイアオイが川の一面を覆って何億円か掛けて撤去したり、鶴田ダムでたくさん発電が必要な時には放流をするんですが、そうすると水が減って鮎が上流へ行けなくなったり、洪水や護岸工事とかいろんな理由が重なり鮎が獲れなくなりました。

「漁協の活動」

漁協の活動はたくさんあります。放流活動、河川清掃、生物調査、濁り防止作業、外来種駆除作業など、言い出したら切りがありません。簡単にいうと“川と人が共存する活動”です。

昔の放流活動では、自分達で稚鮎を獲って放流していました。捕獲のやり方は漁協によって違いがあります。私達のやり方は、イカダを出して川に餌を流し、網を仕掛けます。夜はイカダにランプを灯し、稚鮎がその光にたくさん寄ってくるので、仕掛けた網を一気に引き揚げて捕獲する方法もやりました。１日で 100kgくらい獲れた頃もあります。獲れた稚鮎は川内川の支流ごとに分けて放流していました。

しかし今は、稚鮎も獲れないので、天降川とか他所から買ってきて放流しているのが現状です。

「活動のきっかけ」

私自身はね、今の NTT が電電公社（日本電信電話公社）時代に入社して、ずっとコンピューター１本で来た人間です。55 歳で退職してから伊佐市に帰ってきました。私は 15 年前に帰ってきて漁協に入りました。私達が子供の頃、遊び場が無いから川に行って魚を獲るわけですよ。それを手土産に持って帰って母親に料理してもらったり、川にはしょっちゅう行っていましたから。

普通、漁協といったら海や川で魚を取って生業にするわけですよ。でも、川内川上流漁協というのは、魚を取って生業にしている人は一人もいません。皆さんいろいろな仕事をされていたり、定年退職された方が現在 100 名ほど集まっているんです。魚釣りが趣味な人や川をきれいにしようとする志のある人たちが地域貢献ということでやっている人ばっかりです。

「やりがい」

漁協に限らず何でもそうだけど、いろんな人と知り合える。そして、みんな魚獲りが好きとか、川に行くのが趣味な人達です。草刈り作業は大変ですよ、寒い時も暑い時もある。でも、いやだったことはない。やっぱり、なにか楽しみがある。それは、何かといったら人と人の付き合いだと思います。漁協でも、いろんな職種や技術の経験のあるいい仲間が集まって、「そういう釣り方もあるんだね」とか「人生経験の話」など日々会うたびに勉強になるから楽しいですね。